

学界展望

どのようにアカデミック・コミュニケーション能力を高めるか

谷本 寛治

早稲田大学商学大学院商学部教授

1. はじめに*

アカデミック・コミュニケーションとは、一般に論文や専門書の出版、学会・研究会での報告などを指し、さらに教育やアカデミック・コミュニティにおけるさまざまな役割を担って活動していくことも含まれます。本稿では、研究者が論文をまとめ学術雑誌（ジャーナル）に投稿していくことに焦点を当てまとめています。とくに海外のジャーナルに投稿したり、カンファレンスで発表したりしていくことを念頭に、押さえておくべきポイントを考えていきます。

論文の書き方という本はたくさん出ています。そこでは一般にテーマの考え方、文献・資料の見つけ方、引用の仕方、調査の仕方、問題設定から結論への論理的な展開の仕方、論文の形式など基本的な説明がなされています。一度それら先学のまとめた手引き書を読むことを勧めます。さらにもう一歩進んで、博士課程の学生や若手研究者が海外のジャーナルに投稿するレベルでの論文の書き方を教示するものもあり

ます（日本語では、例えば医・理系を対象とした上出, 2014; 佐藤, 2016a; 2016b; 政治学者の川崎, 2010; 心理学者の Silvia, 2007 の邦訳など）。指導教授が院生に指南したり、学会のドクトラルワークショップなどにおいてベテランの研究者が経験的に語ることがありますが、自ら苦勞しながら身に付けていくということも多いと思います。私もそうでしたが、ただ自己流ではなかなか成果は得られません。そこでここでは社会科学・経営学・「企業と社会」領域を前提にしたガイドをまとめていこうと思います。こういった論文作成ガイドを書くに当たっては、さまざまな論者の論考やスピーチも参考にしていますが、これまで自分が論文や本を出版してきたことや、国内外のジャーナルのエディターまたレビューワーとして経験してきたことを踏まえています。

以下本稿は3つのパートから構成されています。1. 論文を書くことについて、2. 論文を出版することについて、3. 研究者としての活動。ここに書かれていることは、研究し論文を書いていく上で一般に共有されている問題であり、研究者にとっては永遠のテーマと言えるで

*本稿は、若手研究者向けのレクチャー：ベルリン自由大学2017年7月27日、大阪市立大学2018年5月2日や、JFBS 部会2018年6月9日での報告などを基にまとめている。

しょう。

2. 論文を書くことについて

2-1. 学術論文について

学術論文を書くに当たっては、いくつかの基本的なポイントを踏まえる必要があります。リーズ大学の Timothy Devinney 教授は、2014 年フンボルト大学で行なわれた第 6 回 International Conference on Corporate Sustainability and Responsibility でのドクトラルワークショップにおけるレクチャーにおいて、学術論文には次の基本的な問いがなければならないと説明しています。

- (1) 誰に (To Whom?): 誰に読んでもらいたいのか?
- (2) 何を (The What?): 何を伝えたいのか? あなたの貢献はどこにあるのか? それは「誰に」の問題ともかわる。
- (3) なぜ (The Why?): なぜそれを主張したいのか? それはまた「誰に」かわる。
- (4) どのように (The How?): 自分の考えられていることが学界や実務界にどのような意味があるのか? それはまた彼らに伝わる「言葉」で書かれているか。

自分はおもしろいと思っていても他の人が関心をもってくれるとは限りません。調査・分析を行う前に、とくに何を誰に対して明らかにしたいのか、それは学問的に意義のある研究なのか、基本的な問題関心・問題提起を明確にすることが重要です。

ところで一般に学術雑誌に掲載されている論文にはいくつかのタイプが存在します。ScholarOne Manuscripts (Thomason Renters 社が開発し多くのジャーナルが利用している論文の投稿・

レビューのプロセスを管理するシステム) において次のようなタイプ分けをしていますので、改めて確認しておきましょう。

- (1) 学術論文: 調査・分析に基づく論文。研究は、モデルの構築/検証, アクション・リサーチ, アンケート/データ分析, フィールドワーク, 実証分析などに基づくもの。
- (2) コンセプト論文: 調査・分析に基づくものではなく、哲学的な議論や、先行研究の比較検討を通して仮説を鍛えるもの、今後の研究のベースとなるもの。
- (3) ケーススタディー: インタビューなどによって具体的な事例や経験を描写するもの。ただ時系列に動きを説明するのではなく、どのような視点で描写するのかアウトラインが必要です。
- (4) 文献レビュー: 特定の研究テーマに関連する論文を網羅的に読み整理するもの、あるいは従来の考え方とは異なる視点を提示するために批判的に整理するもの。その際単に論文を順番にまとめるのではなく、中心となるアイデアを展開するアウトラインが必要です (Silvia, 2007)。
- (5) 事象レビュー: ある概念や現象について全体像を示す、あるいは歴史的な考察を行うもの。これも上記と同じく単に説明するのではなく、何のためにレビューするのか明確なアウトラインが必要です。

以下では本稿が焦点を当てている (1) の学術論文について考えていくことにしましょう。学術論文の基本的な構造には次の 7 つのポイントが欠かせません。

- (1) 導入: 何を明らかにしたいのか、問題提起を行う。

- (2) 先行研究のレビュー：過去にどのような議論がなされてきたのか、基本的な先行研究を押さえ、そこにどのような問題があるのかを明らかにする。
- (3) 分析のフレームワーク：先行研究のレビューを踏まえてリサーチ・クエスチョン、仮説をたてる（新たな仮説の検証あるいは定説を見直し検証）。
- (4) 方法：適切な分析方法（質的分析・量的分析）を選択する。
- (5) データ取得：それぞれの方法に基づいてデータを集め、エビデンス・ベースの研究を行う。
- (6) 議論：理論的なフレームワークに基づいてデータ分析の結果をまとめ、検討する。
- (7) 結論：はじめに示したリサーチ・クエスチョンに応え、理論的・実務的インプリケーションを示す。また今回の研究の限界も言及する。何が言え、何が言えなかったのか。それは次の研究への展望にもなります。

論文の最後に参考文献を示しますが、当該領域における重要な論文を慎重に選別することも大切です。

2-2. 学術論文における課題

こういった論文作成においてよく見られる問題点をまとめておきましょう。

- (1) 何を明らかにしたいのかが明確でない。調査・分析を通して何を明らかにし主張したいのか、問題提起が不明瞭な論文が少なくありません。
- (2) 関係する先行研究のレビューが十分に行われていない。単なる議論の整理に終わっていないか、理論的なフレームワークや仮説が導き出せているかがポイントです。
- (3) 理論的なフレームワークと調査・分析部分がつながっていない。このタイプの問題点はよく見うけられます。
- (4) 調査の方法・分析が適切でない。方法そのものの選択が適切かどうか。質的調査では、例えばインタビューが浅く不十分でないか。さまざまな立場の関係者や資料から裏付けが取れているか。量的調査では、例えばアンケート調査の設計が適切か、サンプル数は十分か、分析の手法が適切であるかなど、方法論の基本を押さえておかねばいけません。
- (5) 分析—議論—結論への流れが論理的につながっていない。議論が飛んでいないか、注意深く展開する必要があります。
- (6) 研究の貢献度が明確でない。理論的・実務的なインプリケーションを明示しているか。

とくに学術論文は単なる事例紹介・地域研究やデータ分析ではなく、理論的な貢献が求められます。理論的貢献という場合Crane et al. (2016a; 2016b) は次の3点を指摘しています。①新しい理論を提示すること：「企業と社会」領域で言えば、特定の国・地域の描写にとどまらず、従来の概念では説明しきれない現象に対して国際的・一般的なコンテキストの中で新しい視点を提供すること。②既存の理論をより発展させる：アングロサクソンの経済社会をベースに発展した理論・コア概念が、異なる国・地域のコンテキストにおいても説明力をもつ新しい可能性を示すこと。③既存の理論の適応可能性を示すこと：新しいデータや方法によって既存の理論をテストしその説明力を示すこと。新しいオリジナルな理論を提示することは理想ですが、現

実的に言えることは、これまでの議論に存在する小さなギャップや不足点を見出し、それを少しでも埋めること、新しい現象を新たな視点から理論的に説明することができれば意義があると思います。

- (7) 読みやすい文章で書かれていない。Gastel and Day (2016) は、正確で理解しやすい論文を書くことは研究それ自体と同じくらい重要なことである、と指摘しています。せっかくの研究成果も悪文では伝わりません (Silvia, 2007)。分かりやすい説得力ある文章になっているか、不十分なまた不必要な部分はないか。イギリス英語として正しく明瞭な文章になっているか (セイン, 2011)、できれば専門家に英語を校正してもらうことを勧めます。よい文章を書くにはトレーニングが必要です (例えば, Glasman-Deal, 2009; Bailey, 2015 など参照)。他のスキルと同じようにたくさん書いて練習を積むしかないので、基本的に良いアウトプットを期待するには、たくさんのインプット (読むこと) の積み重ねが必要だと思います。

3. 論文を出版することについて

3-1. ジャーナルの選択

論文を仕上げると、次にどのジャーナルに投稿するか、ということが課題となります。これははじめに指摘した「誰に」という問いと関係します。伝統的で広いテーマを扱うジャーナルに投稿するか、比較的新しい専門的なジャーナルに投稿するか (「企業と社会」領域では、谷本 2017, p.146 参照)。ジャーナルが特集を組んで論文を募る場合や、カンファレンスが大会のテーマとからめてジャーナルと連携し特集を設定する場合もあります。一般的に伝統的な

ジャーナルはポイントが高く、採択率は低く、出版にはハードルが高いものです。新しい専門ジャーナルは歴史が浅い分まだポイントも低く、ハードルが相対的に低く採択されやすいと言えます。ただ新しいジャーナルなら簡単に採択されるというわけではなく、しっかり編集しているジャーナルでは高い評価を得るために厳格な審査をしていることが多いと言えます。

各ジャーナルのウェブサイトには、そのジャーナルの目的や守備範囲 (Aims and Scope) が示されていますので、その趣旨と自分の論文が合うかどうか確認しましょう。次に編集委員 (Editorial Team) のページには、エディター (Editor in Chief, Associate Editor, そして Editorial Board Member) の名前と所属が明記されています。投稿するに際し、そのジャーナルが適切な選択かどうかははっきりしない場合は (特集号の扱う範囲なども含め)、エディターに直接メールで確認すればいいでしょう。

執筆要綱 (Author Guideline) のページには、形式、制限文字数、論文のまとめ方、参考文献の書き方、さらに著作権 (自身の原稿のコピーライトのみならず、引用した例えば図表などのコピーライトなど) に関して細かな規定・指示がありますから、丁寧に確認する必要があります。また論文を提出するに当たって、ジャーナルのシステムを通して行うことが多いので、そこに登録する必要があります (例えば前段でみた ScholarOne System)。

また最近、オンライン出版によるオープンアクセスのジャーナルが増えています。そこには伝統的で信頼できる出版社によるものばかりではなく、あやしいものが混在しています (Musick, 2015)。きちんと審査をしないのみならず、中には predatory journal と呼ばれる投稿料を搾取することを目的としているものもありますので、注意が必要です (そういったものを調べるに

は、例えば <https://beallslit.weebly.com> など参照)。

3-2. レビュープロセス

投稿した論文はどのように審査されるのか、そのポイントを確認しましょう。その前にまずジャーナルの仕組みについてみておきましょう。前項でみたように、ジャーナルのウェブページには編集チームが開示されています。彼らの役割は投稿された論文を受けつけ、レビューワーを選出し、彼らの評価に基づいて掲載するかどうか最終判断をします。まず投稿された論文の内容がジャーナルの主旨やレベルと合わない、形式が整っていないなど論文に根本的な問題がある場合は、エディター自身の判断でリジェクト：desk reject とすることもあります。そこがクリアできた場合、エディターは複数のレビューワーに審査を依頼することになります。エディターはレビューワーの評価に基づき、採択：accept、修正後採択：minor revision、修正後再審査：major revision、掲載不可：reject の判断を下すことになります。要修正のコメントを受けた投稿者は、それをもとに書き直し、より良い論文に仕上げていきます（レビューワーには建設的なコメントを書くことが求められます）。このレビュー・プロセスにおけるコミュニケーションはとても重要です（双方とも忍耐が求められるプロセスでもあります）。もしリジェクトされても、レビューワーからのコメントは論文を再考していく上で非常に貴重なアドバイスになります。良いジャーナルほど良いコメントが届くことが多いと言えます。エディターはこのプロセスに時間がかからないよう、できるだけ早く進めていく努力が求められます。

ジャーナルが求める論文のポイントは、一般的に次のようにまとめられます。これは社会科

学・人文学分野でたくさんのジャーナルを出版している Emerald 社が、投稿者に対して示しているものです。

- (1) 独創性：投稿論文は出版に値する学術的に新しい意味があるか。期待される成果（インパクト）の大きさ。
- (2) 先行研究のレビュー：関係する領域の先行研究を踏まえ引用しているか。見落している重要な議論はないか。
- (3) 方法：論文は適正な理論、概念に基づいて書かれているか。調査やその方法は適切に設計されているか。
- (4) 結果：調査の結果は的確に分析されているか。結論は論理的に導き出されているか。
- (5) インプリケーション：以上のことに基づいて、論文は理論的、実務的、政策的なインプリケーションを示しているか。理論と実務の溝をつなげられているか、社会に何らかのインパクトを与えられているか。
- (6) コミュニケーション：論文は当該学術分野で使われている言語や概念、またジャーナル読者の期待する知識にふさわしいものとして書かれているか。論文は読みやすい表現や構成に配慮されているか。

リジェクトは研究者にとって常にありうることです。大事なことは次のステップをいかに踏み出すかにあります。レビューワーが間違っている場合や見解が異なり対立する場合もありますが（もちろん反論があればその旨伝えればいいでしょう）、複数の目でみて問題が指摘される場合は、やはり再検討すべき何らかの修正点があると言っていると思います。例えば Devinney (2014) は次のように指摘しています。①ジャーナルの選択に問題がなかったか（「誰に」の問題）、②適切な「言語」で書かれて

表1 投稿前のチェックリスト 12のポイント

1.	あなたの原稿はジャーナルの目的・守備範囲と適合していますか
2.	原稿は学術論文としての質を満たしていますか
3.	原稿は十分に推敲されていますか
4.	当該領域の研究に資するものですか
5.	理論的な貢献がありますか
6.	扱っている現象を理論的に説明できていますか
7.	扱っているケースの地理的文脈を超えた理論的分析ができていますか
8.	調査・分析がリサーチ・クエスチョンと符号していますか
9.	質的研究の場合、単なる事例分析に終わっていませんか
10.	調査・分析の方法が適切であると説明できていますか
11.	ジャーナルが求める投稿要件をきちんと押さえていますか
12.	エディターやレビューワーと建設的なコミュニケーションができていますか

いるか（「どのように」の問題）、③関心を引くテーマか（「なぜ」の問題）、④問題設定が適切か（「何を」の問題）。

こういった点を見直した上で書き直し、できれば信頼できる仲間にみてもらい、批判点がうまく修正されているか確認してもらえるといいでしょう。そういった作業をすることなくすぐ別の投稿先を探すことは勧めません。丁寧にレビューワーにレスポンスを書き、論文を修正していきましょう。

ここまでのまとめとして, Crane et al. (2017) が論文をジャーナルに投稿する前に確認すべきチェックリストを整理していますので (p.4), ここに引用しておきます (表1)。

4. 研究者としての活動

4-1. 研究者として求められること

研究者が研究をし、論文を書いていくに当たって大切なこと（資質、理論、方法、倫理など）をまとめておきましょう。

(1) 現実感覚：研究のための研究に陥らないためには、いま企業、社会において解決が求

められている問題を知る現実感覚 (sense of reality) が必要です。単にブームの目先のテーマに飛びつくのではなく、企業と社会の持続可能な発展に何らかの貢献が期待できるか考えましょう。現実感覚を得るには現場に出て具体的な課題を知ること、とくに若い時期にインターンやボランティアで企業や社会の現実に触れることは大事です。ただ論文とデータだけをみていると殻に閉じこもった状態になり、研究の意義を示すことができなくなります。

(2) 哲学：なぜその問題を取り上げるのか、何が問われているのかを考える際、現代社会における経済的・社会的・政治的・国際的な背景や潮流を捉え理解するベースが必要です。データを集めたただ相関関係・因果関係を分析するだけではなく、その前提として問題を取りあげることにはどのような意味があるのか明示できなければなりません。哲学は現実感覚と一対のものと言えるでしょう。このことは「誰に」「何を」伝えたいのかということと深くかかわっています。

(3) ディシプリン：それぞれの学問分野に蓄積

された知識や方法などの規律に基づいているか。現象をどのような学問的視点から捉え、分析し、議論しているか。この基盤が弱いと学問的・科学的な研究にはなりません。また学問の細分化が進む一方で、複雑に絡み合った現象を捉えるために学際的な(トランス・ディシプリナリー)研究も必要視されています。「企業と社会」研究においては、新しいアプローチが求められています(Schaltegger et al, 2013 など)。

- (4) 方法：当該研究に適切な研究方法、質的方法・量的方法を習得し、そのスキルを高めることは肝要です。また各方法の長所を組み合わせて、研究していくことも求められています(Creswell and Clark, 2007; Creswell, 2015 など)。
- (5) 論理的思考：論理的な思考(logical thinking)、批判的な思考(critical thinking)によって議論を行うこと。問題提起から結論に達するまでのプロセスにおいて、感覚的な推論ではなく、データによる裏付けをもとに説明することが求められます。エビデンス・ベースの研究は、研究と実務の間でギャップを出来るだけ生まないようにするために必要です(Rousseau, 2006 など)。
- (6) 倫理：研究、論文作成に当たって不正行為には注意する必要があります。国際的な出版社 Elsevier は、若手研究者向けのキャリアサポートのサイトにおいて(詳しくは本項最後の〈補足〉参照)、研究や出版の倫理に関してまとめています。①研究捏造：データの偽造・改ざん。②剽窃・盗用：他人の論文を許可なく意図的に利用すること。注意深くノートしておかないと、意図せざるとも盗用してしまうことがあります。③二重投稿：投稿論文はオリジナルで未発表の研究であることが条件で、同時に

複数のジャーナルに投稿することは禁じられています。④サラミ法：1本の論文を複数の論文に切り分けること。⑤オーサーシップ：実際に研究に関与していない人を著者に加えること、ゴーストオーサー等。⑥利益相反：経済的な利益相反によって客観性を損なうこと。(http://jp.elsevier.com/early-career-researchers/home 参照)

これら6つのことはすぐに身につくことではありませんが、研究者は常に意識し、学界・現場とのフィードバックを通してその能力を高めていくことが望まれます。

4-2. カンファレンスでの報告

研究者にとって学会のカンファレンス(また学内外のセミナー)で研究の成果を報告することは大事なことです。いつもと異なる目で評価を受けることは、学術論文を仕上げていくプロセスにおいてとても重要な契機になります。ここではカンファレンスで報告を行う際に確認しておくべき点についてまとめておきます。とくに海外のカンファレンスで報告する際には十分な準備が必要です。

- (1) 適切なカンファレンスの選択：どのカンファレンスで、いつ何を報告するか。論文の作成スケジュールに沿って考えましょう。学会が開催するカンファレンスは、会員でなければ報告できないものも多いですが、テーマに沿ったオープンなカンファレンスもたくさんあり、最適な機会を論文作成のスケジュールに合わせて考えましょう。海外での報告は度々できるわけではないので、慎重に機会を選ぶ必要があります(「企業と社会」関係のカンファレンス情報については、http://j-fbs.jp/info.html 参照)。

博士課程の学生は、カンファレンスの際に開催されるドクトラルワークショップに参加することを勧めます。一般報告より長い時間をかけてベテランの教授がコメントしてくれますし、研究仲間を見つけるいい機会にもなります。

- (2) 応募：エントリーする際、カンファレンスによって何を提出するのかチェックすること。カンファレンスによって採否の基準はさまざまです。数百ワードのアブストラクトや数ページのペーパーから、フルペーパーの提出を求めダブル・ブラインド・レビューによる審査を行うものまであります。

カンファレンス・ペーパーはそのままにせず、報告後フィードバックを踏まえて修正し、学術論文として完成させましょう。

- (3) 事前準備。事前に十分な準備をすることで必要以上に緊張することから自分を救うことができます。まず報告の準備に関して。時間をかけて準備を行うことが大切です。報告の焦点を絞り込み、考えていることをすべて組み込まないようにする。報告の流れを明確にする。聴衆にわかりやすいスライドをつくる。原稿を読み上げることはしない。時間制限を守りわかりやすく話す (Huang, 2010; 佐藤, 2017 など参照)。他の人の報告スタイルから学ぶことも有効です。

次にロジスティックに関して。とくに海外でのカンファレンスでは早めに登録をし、ホテルや飛行機等の予約をすること。できるだけ前日に到着し、当日も自分の報告会場を下見することを勧めます。

- (4) フィードバック。すべての人が自分の報告に関心をもってくれる訳ではないので、質問を受けることは貴重です。質問に対して

即座に的確に応答することは容易なことではありませんが、これは場数を踏み経験を積むこと以外に最善な方策はないと思います。学会報告において大切なことは参加者とのコミュニケーションであり、それは報告の場のみならずコーヒープレイクや食事などの場においても可能です。今後の研究活動の上でネットワークを広げていくことはとても重要です。カンファレンスに出かけていく大きな目的の一つと言えます。語学力に自信がないからといって引っ込み思案になっているのは、何も得られません。また会話・議論の能力を高めるトレーニングも必要です (Huang, 2010)。

5. 最後に

研究者が論文を書き出版するということは、誰かに何かを伝えたい、これまでにない何か新しいことを著したいということがベースにあるはずです。第2節でみた「誰に・何を・なぜ・どのように」を常に意識し、研究を進めることが大切だと思います。論文は読まれ理解されなければ意味がありません。Gastel and Day (2016) は、「科学的なコミュニケーションは双方向のプロセスである」(p.4) と述べています。そのために必要なことを本稿でまとめてきました。

さらに中長期的な目標・視点の中で今の研究を位置づけることが大切です。短期的な視点で研究のための研究をばらばらに行っているのは、継続的な研究はだんだん難しくなっていくます。またそれでは社会科学としての研究の体系化は望めません (もちろん解説書を書いているだけでも同じです)。ジャーナルのペーパーが基本ですが、一冊の著書として体系的に研究をまとめることも重要なことだと思います (グローバ

- 混合研究法』ナカニシヤ出版, 2017 年)
- and Clark, V.L. (2007) *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Sage. (大谷順子訳『人間科学のための混合研究法：質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房, 2010 年)
- Devinney, T.M. (2014) “Publishing without Perishing”, Lecture at the Doctoral Workshop in the 6th International Conference on Corporate Sustainability and Responsibility, Humboldt University.
- Gastel, B. and Day, R.A. (2016) *How to Write and Publish a Scientific Paper*, 8th Edition, Greenwood.
- Glasman-Deal, H. (2009) *Science Research Writing for Non-Native Speakers of English*, Imperial College Press. (甲斐基文・小島正樹訳『理系研究者のためのアカデミックライティング』東京図書, 2011 年)
- Huang, L.S. (2010) *Academic Communication Skills: Conversation Strategies for International Graduate Students*, University Press of America.
- Musick, C. (2015) “8 questions and answers about predatory journals: Protecting your research, reputation, and funding from theft and fraud,” <https://thinkscience.co.jp/en/articles/Predatory-Journals.html>
- Rousseau, D.M. (2006) “Is There Such Thing as Evidence-Based Management?,” *Academy of Management Review*, Vol.31, No.2, pp.256-269.
- Schaltegger, S., Beckmann, M. and Hansen, E.G. (2013) *Transdisciplinarity in Corporate Sustainability: Mapping the Field*, *Business Strategy and the Environment*, Vol.22, Issue4, pp.219-229.
- Silvia, P. (2007) *How to Write a Lot: a Practical Guide to Productive Writing*, APS. (高橋さきの訳『できる研究者の論文生産術』講談社, 2015 年)
- Zinsser, W.K. (1993) *Writing to Learn*, Harper Perennial.
- 上出洋介 (2014) 『国際誌エディターが教えるアクセプトされる論文の書きかた』丸善出版。
- 川崎剛 (2010) 『社会科学系のための「優秀論文」作成術』勁草書房。
- 佐藤雅昭 (2016a) 『なぜあなたの研究は進まないのか?』メディカルレビュー社。
- (2016b) 『なぜあなたは論文が書けないのか?』メディカルレビュー社。
- (2017) 『なぜあなたの発表は伝わらないのか?』メディカルレビュー社。
- セイン, D. (2011) 『英語ライティングルールブック』(第2版) DHC。
- 谷本寛治 (2013) 『責任ある競争力』NTT 出版。
- (2017) 「「企業と社会」研究の広がり」と課題」(学界展望)『企業と社会フォーラム学会誌』(企業と社会シリーズ6) 千倉書房, pp.144-152。
- (2018) 「持続可能な発展とビジネス教育—期待される研究・教育の課題」『人間会議』夏号。